

日本の経済を担った蚕糸業

明治から昭和の初期にかけて生糸の輸出は現在の自動車産業など工業製品の輸出に匹敵するものであった。

- その始まりは、
- ① 1859(安政 6)年、横浜、長崎、函館が開港された。開港と同時に外国の商人と生糸の取引が行われ生糸の輸出が始まった。
 - ② 当時、ヨーロッパでは蚕の微粒子病が広がり繭の生産、生糸の生産が激減した。そこで日本から生糸の輸出ブームが起こった。しかし、この時代日本の生糸は手で引いていたので不揃いで品質も良くなかった。
 - ③ 明治政府は、1872(明治 5)年に官営富岡製糸場を建設し、全国各地から集まった工女に機械製糸の技術を教え、良質な生糸を大量に生産していった。



■日本生糸の生産と輸出

日本の生糸生産は明治時代の小規模座繰・足踏製糸工場から大規模な器械製糸工場へと転換していった。

これらを蚕糸業の繭生産数と生糸生産の推移を見てみると、繭生産は1930(昭和 5)年に約 40 万トン、生糸生産は 71 万俵(単位:60 kg表)に達した。

また生糸の輸出は、明治 30 年ころまではヨーロッパであったが、第 1 次世界大戦後アメリカの経済が発展するのに伴い圧倒的にアメリカへの輸出比率が大きくなり、特に婦人のシルクストッキング用が多く輸出された。

さらに日本の全輸出の額に占める生糸の輸出額の割合も、明治、大正、昭和初期を通じて、常に 30~50%を占めていたが、生糸輸出数量が最大を記録した1932(昭和 7)年には約 69 万 t の生糸が生産され、そのうち約 58 万 t が輸出(輸出比率:84%)された。なお、1962(昭和 37)年から生糸の輸入が始まった。

■日本の養蚕農家と養蚕農家率

日本の農家は基本的に稲作で、養蚕は農繁期の春 1 回であった。しかし蚕種、養蚕、製糸の改良や「風穴」の蚕種貯蔵などにより春を避けて夏から初秋にかけて蚕の多育化できるようになり、秋蚕飼育を行う農家が多くなった。

このように稲作の労働と重複しない時期に養蚕を行えることにより、1930(昭和 5)年には 220 万戸と実に 40%に達した



■生糸需給と養蚕戸数の推移

年	繭生産数量 (t)	生糸生産数量	生糸輸出数量	生糸輸入数量	養蚕戸数 (百戸)	養蚕農家率 (%)
1915(大正 4)	174, 263	252, 865	178, 142		16, 713	30. 2
1920(大正 9)	237, 465	364, 616	174, 687		18, 910	34
1925(大正14)	317, 924	517, 770	438, 449		19, 442	35. 1
1930(昭和 5)	399, 093	710, 314	477, 438		22, 081	39. 6
1935(昭和10)	307, 434	728, 878	554, 996		18, 868	33. 8
1940(昭和15)	327, 797	712, 804	293, 691		16, 352	30
1945(昭和20)	84, 636	87, 075	-		10, 044	-
1950(昭和25)	80, 415	176, 993	94, 622		8, 346	13. 5
1955(昭和30)	114, 373	289, 476	86, 514		8, 085	13. 4
1960(昭和35)	111, 208	300, 796	88, 323		6, 457	10. 7
1965(昭和40)	105, 513	318, 438	17, 285	5, 451	5, 137	9. 2
1970(昭和45)	111, 736	341, 924	1, 242	65, 978	3, 991	7. 5

(出典:養蚕業要覧)